



電子ジャーナル戦略

編集理事 田中良明

電子ジャーナルの進展に伴う価格高騰問題に関しては、御存知の方も多いであろう。雑誌の電子ジャーナル化は10年ほど前から本格化した。しかし、電子ジャーナルの提供にはそれなりの投資が必要であり、出版社の規模の違いによる差が目立つようになった。大出版社は小出版社を買収し、電子情報通信の分野でも名のある出版社が幾つか消えていった。同一出版社から多くの雑誌を購入すれば、紙媒体の場合でも割引があるが、電子ジャーナルの場合は割引率が高い。また、電子ジャーナルでは、最初から抱き合わせの購読契約形態しかない出版社もある。このようにして、雑誌数が多い大出版社に有利な状況が築かれていった。現在、学術関係の電子ジャーナルは、上位10社が論文数の90%を占める寡占状態にある。寡占は価格高騰を招いた。それに対し図書館側は、コンソーシアムを組んで価格交渉を行うことで対抗し、両者の駆け引きが続いている。

ここでは、寡占がもたらした別の問題にも着目したい。大出版社の雑誌は、電子ジャーナル化によってサーキュレーションが大幅に向上した。サーキュレーションが良ければ質の高い論文が投稿され、雑誌の質も高くなる。現在、この好循環状態が続いている。

それでは、投稿、査読、編集の状況はどうであろうか。出版社の論文誌の状況に関しては、私の分野であるネットワーク関係のものについてしか知らないが、学会論文誌とはかなり異なっている。出版社は多数の論文誌を出しているが、一つの論文誌の規模は学会論文誌と比べてはるかに小さい。一つの論文誌に、編集委員が10名から20名程度いる。論文は、質が高いものが少数投稿されてくる。したがって、一人の編集委員が担当する論文数は相当少ない。査読は親切で、コメントは大いに役に立つ。それによって、その論文誌に好感を抱く著者も多い。つまり接客上手ということである。採録率を公表している出版社は少ないが、私が関係しているものから推察すると、結構高い。元々質の高い論文が投稿されているので、当然のことともいえる。

このような状況にある出版社の論文誌と比べて、学会論文誌はどうであろうか。学会論文誌への投稿は、ピンからキリまでである。投稿数は大変多いので、編集委員や査読委員は大忙しである。採録率は低い。論文が不採録になると、関係者の労力が無駄に使われたことになる。著者は仕方がないとしても、編集委員、査読委員、事務局は徒労である。採録率が低いということは、徒労率が高いということである。

しかし、出版社の論文誌があらゆる面で良いわけではない。小さな学会や国際会議は、出版社から論文誌を出すことが多い。学会や国際会議には論文委員会があるが、出版社にも別に編集委員会がある。出版社の編集委員会が、個々の論文の採否に関してまで口を挟むことはないが、もっと上位レベルのことにに関して結構口を出す。論文採録数はもちろんのこと、学会や国際会議の基本方針にまで口を挟むことがある。出版社としては、その論文誌が売れなければならないので、口を挟むのは当然のことであるが、学術を経営の尺度で操られるのには抵抗がある。

全般的に見ると、出版社の論文誌は、関係者の徒労率が低く、掲載料も低い。一方、学会論文誌は、関係者の徒労率が高く、掲載料が高い。学会と出版社の立場の違いや電子ジャーナル戦略の違いによってこの状況がもたらされたのは確実であるが、その因果関係がよく分からない。それを解き明かして学会論文誌をより良くすることが編集理事の宿題であると考えている。